



Title	X-linked Retinoschisis With Point Mutations in the XLR51 Gene
Author(s)	井上, 由美子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43780
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	井 上 由 美 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 6 9 0 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 1 4 年 3 月 2 5 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科外科系専攻
学 位 論 文 名	X-linked Retinoschisis With Point Mutations in the XLRS1 Gene (X連鎖性網膜分離症における XLRS1遺伝子変異)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 田 野 保 雄 (副査) 教 授 不 二 門 尚 教 授 遠 山 正 彌

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

X連鎖性若年性網膜分離症は伴性劣性遺伝形式を示す疾患で、若年者に重篤な視力障害をひきおこす網膜変性症である。特徴的臨床所見としては、眼底所見は車軸状黄斑分離、ときに内層裂孔を伴う周辺部網膜分離、銀箔様網膜反射、さらに網膜電図(ERG)では陰性型b波が知られている。しかし、臨床病型は多岐にわたり、本疾患の早期診断、早期治療は困難であるのが実状である。最近、Sauerらによって、X染色体短腕22.2に位置する本疾患の責任遺伝子であるXLRS1遺伝子が同定された。XLRS1遺伝子は6つのエクソンからなり、ゲノムDNA上にて約15kbにもおよんでいる。さらに、X連鎖性若年性網膜分離症患者のXLRS1遺伝子におけるさまざまな遺伝子変異検索が施行され、5つの1エクソン欠損、12のスプライスサイト変異、11のフレームシフト変異、7つのナンセンス変異、51のミスセンス変異などが既に報告されている。今回、我々は本邦におけるX連鎖性若年性網膜分離症に特徴的な臨床所見をもつ患者でのXLRS1遺伝子変異を分子遺伝学的手法により解析した。

【方法ならびに成績】

本邦において臨床的に眼底検査とERG所見からX連鎖性若年性網膜分離症が疑われた患者とその家族8家系10名を対象とした。臨床病型は、5症例8眼に中心窩網膜分離を、5症例8眼に周辺部網膜分離、3症例3眼に網脈絡膜変性、2症例2眼にbull's eye黄斑部変性、1症例2眼に傍中心窩円形黄斑嚢胞を認めた。ERG所見は、10症例18眼に陰性型b波を認めた。さらに各人の末梢静脈血から定法通りDNAを抽出し、Polymerase Chain Reaction(PCR)法にて隣接する上流と下流のイントロンを含むXLRS1遺伝子の各エクソンを増幅し精製した後、PCRダイレクトシーケンス法にて塩基配列を決定した。新規の変異が疑われた部分は正常なX染色体100個を対象としてPCR-RFLP法を行い遺伝子多型ではないことを確認した。ダイレクトシーケンスの結果、患者10名のXLRS1遺伝子に8つの点遺伝子変異を同定した。それらは、XLRS1遺伝子エクソン4においてはG276Cヌクレオチド変換によるW92C変異、G326Aヌクレオチド変換によるG109E変異、195T欠損によるフレームシフト変異；エクソン5においてはT330Aヌクレオチド変換によるC110X変異；エクソン6においてはC544Tヌクレオチド変換によるR182C変異、C574Tヌクレオチド変換によるP192S変異、G590Cヌクレオチド変換によるR197P変異、C598Tヌクレオチド変換によるR200C変異であった。それらの変異の種類は6つの点遺伝子変異はミスセンス変異、1つは

ナンセンス変異、さらにもう1つはフレームシフト変異であった。さらに、本検索にて同定した8つのうち5つは新規報告のXLRS1点遺伝子変異（C110X 変異、G109E 変異、R200C 変異、R197P 変異、および、195T 欠損によるフレームシフト変異）であった。

【総括】

本研究にて、本邦のX連鎖性若年性網膜分離症患者のXLRS1遺伝子にPCRダイレクトシーケンス法を用いて、5つの新規遺伝子点変異を含む8つの異なる遺伝子変異を同定した。このようにPCRダイレクトシーケンス法などを用いた遺伝子情報の蓄積は、X連鎖性若年性網膜分離症の病因のメカニズムの解明に新たな洞察を加えることが期待される。さらに、XLRS1遺伝子の変異検索によるさまざまな変異の同定は、多彩な臨床像を持つX連鎖性若年性網膜分離症の早期発見、確定診断及び遺伝相談に有用である。最終的には、遺伝子情報を蓄積して変異－表現型の相関関係を明らかにすることが必要で、それによって臨床病型や予後に応じた適切な治療法が確立されると思われる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、疾患原因遺伝子の変異検索という国際的にもきわめて関心の高い問題にとりくんでおり、X連鎖性若年性網膜分離症のXLRS1遺伝子に5つの新規遺伝子点変異を含む8つの異なる遺伝子変異の同定に成功している。本疾患が若年者に重篤な視力障害をひきおこす網膜変性症であり、また、臨床病型が多岐にわたるため早期発見、確定診断が困難であることを考えれば、その意義は極めて大きいと考えられる。このような遺伝子情報の蓄積から、X連鎖性若年性網膜分離症の病因のメカニズムの解明に新たな洞察が加わることが期待される。

本論文は学位の授与に値するものと認める。